１月２１日　ヨハネによる福音書２章1～11節
説教題：「結婚式に参加して」

本日の聖書個所は結婚式の場であり、しかしイエス様が登場するその場面は私たちが想像する結婚式や披露宴よりも、いささか地味な場面となっています。華やかな結婚式のシーンは描かれておらず、「ぶどう酒が足りなくなった」というトラブルが起きた場面であり、イエス様の奇跡を目撃した人もほんの少しばかりでありました。

弟子たちと召使が見ていた中で行われた奇跡なのですが、すでにイエス様に導かれている弟子たちに、わざわざ裏側で奇跡を見せる必要はありません。そしてもともと別に主人がいる召使いがイエス様の弟子になったとも書いていませんから、この奇跡はあまり意味がない奇跡だったとも言えます。イエス様の弟子達は「この方は素晴らしい方だ」と再認識したのでしょうが、人々を信仰に導くという意味ではここでの奇跡はそこまで「必要ではなかった」のです。しかし、イエス様は決して自分の都合のために奇跡を行う方ではありません。つまり、この奇跡もまた「神様の御心を叶えるため」であったのです。

それはやはり、神様の前で行われ、神様と共に喜びの中にある結婚式が、喜びのままで行われるように、という神様の御心を実現するためでありました。この二人を結び合わせてくれたのは、この二人の家族を一つにしてくれたのは神さまだ。その喜びで満たされた結婚式が、さらに喜びに包まれるために、その神様の御心のために行われた業でありました。

ただそれだけでなく、人間の目からは「必要ではないのに行った」、そこにもう一つ見えてくるのは、イエス様の十字架です。罪がないのに十字架にかけられて処刑されることになるイエス様の、その公の歩みの始まりとしてガリラヤでの宣教が始まっています。イエス様は、人生の初めから十字架での死が定められていたことをよく知っていました。だからこそ「自分が行う必要がない」事であっても、イエス様は進んで行ったのです。そこに神様の御心があり、神様が喜んで下さることであれば、と進んで行うのです。最近出版された岩波文庫の新約聖書では、十字架刑のことを「杭で殺す処刑」と翻訳しているそうです。そこで実際に行われていたのは、私たちが十字架という文字を見て想像するよりもはるかに壮絶な処刑です。手首と足に杭を打ち込み、自分の体の重さで少しずつ弱っていくような処刑が、イエス様には行われました。しかも、自分は何も悪くないのに、何の罪も犯していないのに、人間として生まれ、痛みも苦しみも感じる身体でそのすべての痛みと苦しみを受けとめたのです。それをただ「神様のため」に行った、すべての事が神様の御心であるなら躊躇することなく行う、そのイエス様の覚悟が示されている個所でもあるのです。

今日の個所から、イエス様のガリラヤでの宣教活動が始まります。ここまでは洗礼者ヨハネの登場から弟子を招く部分まで、いわばガリラヤで伝道を始める前の準備の部分であり、ここからは、具体的なイエス様の伝道活動が始まります。そのすべての業が、「神様のため」であり、そして「私たちのため」であった、その事がこのカナの婚礼における最初の奇跡からも、そしてイエス様のすべての業からも示されているのです。私たちもまたすべての業を、神様のために、イエス様のために行いましょう。どんなことでも、神様が喜んでくれるように、そしてその喜びがこの江刺教会を満たすように、これからの歩みを続けていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書２章１～11節

・1:三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。